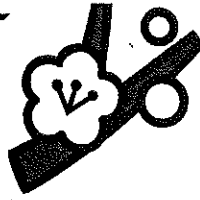


礼拝

令和5年2月13日
9号



明るく正しく親切な人になろう ～三宝帰依の心～

本日は、涅槃会(おんえの法要をお勤めしました。涅槃とはインドの言葉で「吹き消す」という意味があり、次々とわいてくる悪い心やずるい心が吹き消され、覚きとりの心が完成したことを意味します。真実の覚りとは「智慧」仏さまの力で迷いの心を打ち破る働きにより、自分だけなら覺りの世界に居続けることができるが、慈悲心、苦しみを除いて楽しみを与える働きにより、自分さえよければという気持ちを捨て去り、苦しんでいるすべての命を救うまでは覺りの世界に居続けません」という心をいいます。

さて、今月の月間目標は明るく正しく親切な生活を送ることですが、明るい生活とはどういう生活でしょうか。

『善正きことを作(な)す者は、いまよるこぶのちによろこぶ。ふたつながらによろこぶ。善きことをわれはなせり』とかく思いてよろこぶ。かくて幸あるみちを歩めば、いよいよよこるたのしむなり』(法句經十八)

人は、善いことも悪いことも、自分の行動は覺えているものです。特に善いことをすれば何となく嬉しくなり、心も明るい気持ちになります。電車で席をゆずったり荷物を運んであげるなど、小さな行いであっても、その後の心地よさは実に楽しいものです。逆に悪いことをしたり自分の行いが悪いことだと気づいたときは、落ち着かない気持ちになったりひとり悩むこともあります。お互に譲りあえばまだ一人は座れるのに知らん顔をしたり、困っている人に気づきながら黙って過した後の心暗さなどは、本当に自分がいやになってしまうものです。たとえ何らかの理由はあったにしても、人の前でそれを言い出す勇氣の無かったことを情けなく思うこともあります。

無量寿經に「善人は善を行って、明るい生活から益々明るい生活に入る。悪人は悪業を積んで日々暗い生活に入る」とあります。日常の小さな事でも善いことを重ねていくと、心の中は明るく心地よい生活が続きます、楽しい心は楽しい行いを呼び、明るい心は明るい行いを招く。それが習性となればその人は明るい毎日を送れるのです。

『他人の邪曲(よこしま)を觀るなかれ他人の

これを作(な)しかれを作さざるを觀るなかれ。ただおのれの何を作し何を作さざりしをおもうべし』(法句經五十)

私たちの目は外のもの見るようにできているからか、他人の悪い所や誤りには非常に細かい所まで気づきます。しかし自分のこととなると全くと言っていいほど何も知りません。だから自分のことは棚に上げ、他人の欠点や弱点をより一層鋭く観察し厳しく批判してしまうのです。これは争いのもとになり、周囲を暗くします。他人の欠点を見たとき、自分にもそのような欠点はないかと内省することも大切ですが、お互いに自分を内省し謙虚な心が出てくれば、本當に平和な世の中になると思います。謙虚で誠実な心が育っていない人は、自分の欠点や弱点を指摘されるとすぐに怒りを爆発させ、相手の弱点を探し出して反抗するものです。逆に教養の豊かな人は、自分の欠点や弱点を指摘されると、それを自分のこととして捉え、深い内省の中で自身を正しい道へと進め、結果として明るく正しい生活へと自分を導いていくのです。

お釈迦の自燈明・法燈明の教え、そして本校の校訓「三宝帰依」には、不変の真理を学び、善いことは常にすすんで行い、美しい言葉を使い、親切な心で接しあえる人になって欲しいという願いが込められています。その願いを土台とした生き方こそが、まさに明るい生活なのです。